研究の概要

1　今年度の研究の方向性について

（1）昨年度の成果　☞　Ｈ２３年度成果と課題参照

（2）昨年度の課題　☞　Ｈ２３年度成果と課題参照

（3）今年度の方向性

昨年度の成果と課題、そして今年度の学校教育目標から、校内研究の方向性について提案します。また、大前提である「ひびき合い」と「切実な問題」については、しっかりと共通理解します。

①「ひびき合い」について

関わり合い ⇒ **目に見える形。個と個、または個と集団に何らかの関わりが見られる状態**

ひびき合い ⇒ **みんなで関わり合いながら、よりよいものを目指し、よりよいものを築き上げていくことができる姿**

より具体的な子どもの姿としては

目に見える、または見えないが、単元のねらいにより近づく心の変容。
変容とは、「強化」「変化」「統合」が、根拠をともなってなされること。

②「切実な問題」について

昨年度最後の校内研で話し合われたことと、小林先生のお話をもとに、次のように考えます。

・事実に基づく問題
・多様な、あるいは異質な考えや立場に出会う、知ることができる問題
・葛藤を内に持つ。単純に自分で判断できない問題

だから ひびき合う

2　研究の概要

テーマ「ひびき合う三の丸の子どもたち」

研究課題・・・切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成

◎手だて・・・子どもの「切実な問題」を見とった単元構想と授業づくり

ブロックテーマ

低学年	中学年	高学年	個学
感じる心、 素直に表現する自分 ・人の言動に何かを感じる姿 ・自分の思いや他者からの刺激に対し、素直に表現する姿	追究する力、 仲間と支え合う自分 ・自分の問題をとことん追究する姿 ・仲間と協働して追究する姿	仲間への共感、 自立する自分 ・仲間に共感しつつ、自分の思いも大切にする姿 ・新しい価値観にふれ、自分を再構築する姿	感じる心、 気持ちを伝える自分 ・まわりのものごとに心をよせる姿 ・一緒に活動することを楽しいと感じる姿

（1）研究課題と手だて設定の理由

昨年度の課題にある通り、研究課題は２点であり、それらは切り離せないものでした。それは、

「切実な問題を見とり授業をつくること」

子どもの知的好奇心から単元構想をつくることによって、教材分析がこれまでよりも深まりました。しかし、下に示す「授業をつくる」「単元をつくる」定義の中の、「必然性を持って切実な問題発見・問題解決する」ための見とりが欠けているのではないでしょうか。子どもたちが学習のねらいに向けて、教師、子ども、教材がお互いに関わり合う中で、どのような思考過程をたどり、どこで子どもたちが切実な問題意識を持つ可能性があるのか、さらに、指導者である教師自身がなぜそう考えたかを明確にする必要があります。もちろん、実際に学習が始まると構想通りに行かないことが出てきます。その過程での子どもの思考をみとり、当初予想された展開や課題とは異なることはあり得ます。その時の子どもの切実な問題意識とは何かを教師が見とり、子どもと共に学習をつくっていく過程で、単なる「関わり合い」ではなく「ひびき合い」の姿が見られると考えました。

「知的好奇心」と「子ども同士が関わり合う」ことは大前提とし、教師が子どもの切実な問題とは何かを見とって授業をつくることを、引き続き手だてとします。

「授業をつくる」「単元をつくる」 ⇒ **友だちや教師との関わりを通して、必然性を持って問題発見・問題解決しながら学習が進む過程のこと。最終的には、単元のねらいを達成する。**

（2）研究仮説

子どもの切実な問題を見とり授業をつくることで、ひびき合う姿が見られる

（３）研究方法

・一人年二回研究授業（国語、社会、算数、理科、生活、生活単元学習）、レポート報告会。
・研究発表会

３　具体的な研究方法

（１）単元構想と見とり

①ねらいや子どもの実態、文化的可能性等を考えて０次案をつくる

子どもたちが学習のねらいに向けて、教師、子ども、教材がお互いに関わり合う中で、どのような思考過程をたどり、どこで子どもたちが切実な問題意識を持つ可能性があるのかを考えます。もちろん、実際に学習が始まると構想通りに行かないことが出てきますので、その過程での子どもの思考を見とり、当初予想された展開や課題とは異なることがあります。

また、「ただの好奇心（初期衝動）　→　知的好奇心　→　子どもの切実な問題　→　ひびき合う」という過程を教師が見とること、さらに、ある授業の時間だけではなく、その子の実態、生活経験、背景なども含めた見とりが必要です。

ただし、この過程を機械的に授業にあてはめないようにしたいです。始めから切実な問題意識を持っている子もいるので、必ずこうなるという予定調和的には進みません。「この子が、いま、どんなことに興味・関心を持っているのか。」「今日の授業を通じて、変わったこと・変わらないこと（思いや考え、知識も含めて）」をみとっていきます。

②単元終了後の扱い（０次案からｎ次案へ）

当初の構想がどのように変化し、構築されていったのかがわかるように記録として残します。

（２）授業のありかた

研究授業の単元だけでなく、普段の学級経営の中でもできることがありますので、常に意識して学級経営にあたることが大切です。また、次にあげる３パターンは、あくまでも「例えば」であって、子どもの大多数がそうであっても、そうでない子どももいることを忘れないようにしたいものです。

①与えられた教材が知的好奇心を喚起し、子どものものとなる学習
②子どもの知的好奇心がスタートかつゴールの学習
③子どもの知的好奇心が発展していく学習→その過程で切実な問題が生まれる

⇒ どれがいいということではありませんし、子どもから出たものでなければならないということでもありません。子どもの切実な問題意識を教師がどうみとり授業をつくるかが大切です。そして、**子ども・教師・地域の個性を生かしていけるようにしたいです。**

（３）授業形態

様々な場面で、その時に必然性を感じられるような授業形態をとります。ただし、前提は、一人ひとりが自分の考えを持っていることです。

（例）クラス全体　グループ　ペア

低学年では様々な形態を経験、中学年ではそれらのよさを実感、高学年では形態を自分自身で選択できるようになると一番よいと思っていますが、まだその段階ではない場合は、まず様々な関わり合いの場面を通して、子どもたちが経験と実感を持てるように教師が意識していくことが大切と考えています。

また、ペアやグループでの学習には、全体で学習をする時に見られる「つぶやき」レベルの発言を表現するという意図もあることを意識したいものです。そして、その「つぶやき」レベルの発言をグループ内で出し合うことによって、次にどうつながるのかを考えておく必要があります。

（４）授業研究

①研究する教科、条件

・国語、社会、算数、理科、生活、生活単元学習。その他の教科は実践レポート報告会で報告します。
・導入（単元１時間目）は無し→子どもが自分たちの切実な問題を解決していこうとする場面を見るためです。※ただし、個別支援級は、実態に応じて、好奇心を喚起する場面や導入でもよい。
・活動のみの研究授業にはしない→切実な問題を検証するための活動なら部分的に入っていても可能です。

※全ての単元を（１）で述べたような方法でつくっていくことは無理ですので、研究授業で行う単元について、子どもの切実な問題がどこにあるのかをみとり、授業をつくっていきます。

・検討は、学年やブロックを中心にしっかりと行います。

②研究授業を行う時の留意点

〇その一時間だけでなく、単元を通して、教師が子どもの切実な問題をどうとらえ、子どもたちは友だちや教師とどのように関わり合いながら、単元目標に達していくのかが大切です。子どもが切実な問

題を解決する場面、または、何がみんなにとって切実となり得るのかを迷うような場面を研究授業で行うようにします。

〇始めにたてた単元指導計画通りにいかなくて構いません。あくまでもそれは計画です。子どもたちの持った課題や思考の流れによっては、途中で変更していきます。

〇指導案に、教師の考えと現時点または予想される子どもの願いや考えを入れます。さらに、どの子どもが誰と関わることによってひびき合いにつながりそうなのかを予想し、それらを明記します。

③授業研究の視点（*「協議のしかた」参照*）

〇本時をもとに、授業者の願う授業を行うことができたか。

〇本時の学習問題は適切であったか（子どもにとって切実な問題であったか）

〇ひびき合いが見られたかどうか。

・見られなかったとしたら、どこに問題があったのか。

・見られたとしたら、どこがよかったのか。

〇子どもにとっての切実さ、ひびき合いが、授業のなかで板書などを通じて、可視化されていたか。

〇授業者の願いと子どもの思考から、今後の授業をどのように展開していくことがよいのか。

〇子どもの言動をよく観察し、発言、反応、活動、表現物から話し合えるようにする。

→本時をもとに、これからの授業をどのように展開するとよいか、という発展的な協議にします。

〇協議の最後に、その授業での成果と課題をまとめ、見える形で記録を積み重ねていきます。

④研究会の持ち方（*「協議のしかた」参照*）

（５）授業研究について

①方法

・全員研究授業発表当日含め２回　・全体研は、低中高各１回計３回。

・今年度に限り、簡単な単元構想と、座席表形式で本時についてのみ作成しています。「切実な問題」と考えた理由は必ず入れます。

②授業研究の視点

・特に「切実な問題」であったかどうか、具体的な子どもの姿を通して自分なりに考えます。

③授業研究参観方法（全体研は５回、それ以外は選択研で参加は自由）

・全体研４回は全員参加。

・小林先生来校は４回。１回は単元構想について、残り３回は授業研究でのご指導。

・それ以外は全て選択研。回数は決めません。自分の学年は必ず参加し、協議は参加可能な人で行う。

④研究発表

（６）ブロック

低（９人）＝個学＋１年＋２年、中（６人）＝３年＋４年＋図工専科、高（７人）＝５年＋６年＋算数TT

（７）実践レポート報告会（年４回）

・６月…学級経営案の紹介

※経営案に入れておく内容は以下の通りです。

・「聞く」「話す」という、学習活動の基礎基本となるようなことへの取り組み方法

・学級経営とブロックテーマとの関わり

・研究授業で行う教科と単元についての大まかな内容

・７月…６月に示した学級経営の経過や変更点報告

・１月…冬休み前までに知的好奇心に関する授業の実践レポート

・２月…学級経営報告　　※６月、７月、２月の報告会のグループは同じ

（８）子どもの意識調査

１月に行う子どものアンケートに、校内研究に関わる項目を入れて、意識調査とします。

（９）研究のまとめ方

〇昨年度までと同様、HP にのせます。研究授業での実践と授業実践レポート１つです。

(10）その他

〇「聴く」「話す」ことを意図的に指導していきます。くれぐれも、スキルのみの指導とならないように、話し合いたいと子どもたちが思う教材や題材を準備していきます。話し合いのための話し合いにならないよう留意したいです。１年間の学級、教科経営を通じて、「聴型・話型」のようなモデルが次第に必要としなくなるような子ども・クラスに育てていく、ということをめざします。

〇子どもたちが安心して学習に取り組める環境づくり→心を育てることも忘れずにしたいです。

〇子どもたちに、自己決定と自己責任の習慣（自分で決めたことをやり遂げようとする）をつけます。またそれをやり遂げるまでの教師の適切な働きかけや指導が必要です。